

# 善教寺の踏み絵

汐月 三代吉

(会員・佐伯市野岡)

本号前頁で、宮下良明氏が「乱世の武将と善教寺」を書かれて、その関係系図を略記されている。

佐伯藩祖毛利高政や石川康長、また、藤堂高虎の血縁関係から宗教的なつながりに触れて、乱世武将の人間関係と善教寺をまとめられている。

この中で、一言最後の「踏み絵」の話が書かれているので、これについて言及して置きたい。

この話については、かねて宮下氏から聞いていた認識があったが、たまたまその経緯を聞き出す機会があったので、ここで紹介して置こう。

平成6年3月18・19日の2日間、佐伯図書館に於いて「豊後南画遺作遺品 小栗布岳展」が開催された。この人は善教寺の第十三代住職で、桑門豪現住職の曾祖父にあたる方で、十四才で咸宜園に学び、本山の東本願寺でも長く修行した。明治に入ると大蔵省・教部省でも活躍し、同三十八年、寺内に竹林庵を結び自適した。

画は終始杏雨の風をうけた作品を描き、静肅と詩情のある作品が多く書かれている。

この展示会には善教寺さんの全面的なご協力で、寺所蔵の作品四十数点を出品して頂き、市内に所持している方の二幅と共に展示させて頂き、大変盛況であった。

私はこの準備に参加して、再三寺に入りしている時老師に「踏み絵」の件を尋ねたところ、寺に有るのは事実だが、その日は布岳展展示品の事で忙しかった為に、拝見させて頂けずに帰って、後日にもまだその機会に恵まれていない。しかし、その時に話されたのはこうであった。概要を紹介しよう。

明治の末頃であるう、布岳よくあちこち旅行する中で、長崎を訪れたとき、ふと店先にある「踏み絵」に目が止まり、「もう踏み絵も歴史上の資料として尋ねる時代、」何げなく買って帰ったものらしい。

宮下氏の述べているような、善教寺に有るからといって、それが直ちに、「善教寺そのものがキリスト教の転宗寺ではなかったらうか、」というのはどうも早計のようである。以上のように、善教寺と踏み絵の関係については現在ただ寺に有るという事だけで、キリスト教云々とは切り離して考えるべきであろう。